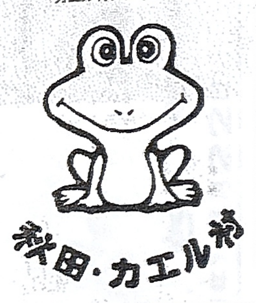
仙北新報改題
秋田民報
発行所　秋田民報社
編集印刷発行人　佐藤祐三
秋田県大曲市栄町
電話　３－２１２１（代）
振替　秋田　97

その名も「カエル村」

—西仙北町に開村—

美しい自然、まごころをみんなに

大沢郷の40ヘクタールを開放


カエル村シンボルマーク

秋田の自然、まごころに満ちた素朴な人情を県内外に広めるとともに、自然とともに暮らす喜びを知ってもらおうと、西仙北町大沢郷地区に建設が進められていた「カエル村」が十日オープン、同日、関係者二十人が出席してなべっこを囲みながら和やかに開村式が行われた。

「カエル村」は、ソマリアへの愛の一粒運動などボランティア活動を続けている同町刈和野の佐々木正光さん（33）が主唱した一種の自然にかえるふるさと運動。カエルを四季の美しい移り変わりのシンボルとし、人間生活が自然にカエル（帰る）、物質文明に浸った生活を見直し、自分の生活をカエル（変える）ことを目指し、「カエル村」と名付けられた。

この考えに共鳴した地元の農業、田村為治さん（59）が、所有地の山林四十㌶を提供、村長さんに就任した。

村は田村さん親子が手造りでつくったカヤぶき小屋と炭焼き小屋、広場と畑で、人間の手はあまり加わっていない施設だけ。もちろん電気、ガス、水道はない。「生活はあなた自身の手で」と、すべて村民まかせ。野菜づくり、木登り、川遊び、森林浴、手造り料理など田村村長のもと、村民が工夫して自然のなかで遊びを見つけて暮らしていく。

標高百二十㍍ほどの小高い山あいを切り開いた山林。入口から登るとすぐ炭焼き小屋と、自然木で組んだテーブル、イスの置かれた広場がある。稜線伝いに八百五十㍍の散策コースを行くと、クリの木で組んだカヤぶき小屋。自然むき出しの環境だ。

一月から十二月まで、季節に応じた村の暮らしが出きるよう「体験生活こよみ」もつくられている。村民のメーン行事になるもので、たとえば、一月はトウフ、納豆づくり、二月は刈和野大綱引き、三月はワラ細工、四月はジャガイモの種まき、五月は田植えーと、さまざまな催しが折り込まれている。

入村料は一日六百円。無料の自炊用具、テントがあるほか、山小屋一泊千円（自炊、入村料込み）民宿同二千五百円（二食付き、入場料込み）。十日以上滞在の人には同村特製の手造りミソ十㌔をプレゼントするという。問い合わせは佐々木さん（電話〇一八七七ー五ー二六二六）へ。

SHELL
雁谷商店
☎2－0015

表札と銘判
みとめ印ゴム印
58.10.4
吉村印房
電②3016 ③5198

No.16

河北新報 秋田
58.10.11

西仙北町猿井沢の山中

「カエル村」開村

自炊、民宿　さまざまな体験

自然の中で生きカエル

秋田の恵まれた自然と、全国的に定評のある「まごころと人情」を資源として、県内外に秋田の良さを理解してもらおう―と、西仙北町大沢郷円行寺猿井沢の山中に作られた"カエル村"の開村式が十日、カエル村の広場で行われ、村の発展と安全を祈った。

カエル村は、自然にカエル（帰る）こと、物質文明に浸った現在の生活をカエリ（省）みるとともに、これまでの生活態度や考え方をカエル（変える）ことを狙って名づけられた。

村の発展を祈って開村式

村は同町猿井沢集落から南へ約二㌔、通称雑木山を中心にした一帯約四十㌶で、標高百—百三十㍍の山林地帯。村に三カ所の広場を造り、第一の広場には炭焼き小屋があり、第二の広場には自炊場、第三の広場には寝泊まりできるわらぶきの小屋を建てた。

この村の設立発案者は同町刈和野、会社経営佐々木正光さん（三三）。佐々木さんは「ソマリアの飢餓を救おう」という愛の米一粒運動の推進役で知られた人。佐々木さんの企画に共鳴して"村長"を引き受けたのは地元の農業田村為治さん（五九）で、自分の山と炭焼き小屋を提供した。

村はオールシーズン制となっており、村で出した体験生活暦によると、一月豆腐や納豆作り、二月かまくら祭り、三月わら細工、四月広場わきを開拓して野菜作り、五月タケノコ採り、六月野菜作り、七月ジュンサイ採り、八月盆踊り、九月キノコ、山ブドウ狩り、十月イモ煮、十一月漬物作り、十二月炭焼き—などとなっている。

入村料は一日六百円、自炊用具、テントなどは無料。宿泊料は山小屋一泊千円（自炊、入村料込み）、民宿一泊二千五百円（入村料、二食付き）となっている。早くも佐々木さんの友人（東京）が入村を申し込んでいる。村に十日間以上滞在した人にはカエル村特製の手作りみそ十㌔をプレゼント。

入村申し込みは西仙北町刈和野、佐々木興業内カエル村事務局＝電01877（5）2626＝へ。

この日は、猿井沢集落の人たちが集まり、神事の後、佐々木さんと田村村長が、ブドウのつるをナタで切るという異色のテープカットで開村、第三の広場で祝杯とイモ煮会を催し開村を祝った。